

南大沢学園養護学校職員である同僚の皆さま

卒業担当学年の皆さまは、とりわけ、感慨深いお気持ちで今日をお迎えのことと思います。お子様たちのご卒業に、「おめでとうございます」と申し上げます。

私は今日も、「君が代」斉唱時に起立を求める職務命令に従うことはできません。

「停職6ヶ月の次はもうない」(06・5教育委員会定例会)と都教委は言いましたから、今日の不起立でクビが宣告されているような身の私は、それを甘んじて受けることはできず、やむにやまれぬ気持ちから毎日1時間年休を取り、都教委に「不起立でクビにしないで!」と訴えに行っています。それはまた、私への弾圧が、個人的なことではなく、私を見せしめとして東京の教職員全員の息の根を止めるものだと思うからです。

東京の教職員の多くが、都教委の「日の丸・君が代」の強制、教員処分、そして、石原都知事になってからの教育行政を「おかしい!」と感じています。私がこの職場に来てから、まだことばを交わしていない人の方が多いですので、はっきりしたことはわかりませんが、この職場の皆さんも、多くは、同様に感じていらっしゃるかと思います。

「クビにならないように」と、同僚である皆さんの何人もの方が私に忠告をしてくださいました。お気持ちはとつてもありがたいです。教職の場にいたいという思いは皆さんと同じです。だから揺れたり悩んだりもしました。でも、やはり私は、自分を偽ることもその姿を生徒に見せることもできないと思いました。また、「無理を通して道理引込む」社会にはいけないと思います。私がこれまで関わってきた生徒たちに対して、私は責任ある生き方をしたいと思うのです。

どうぞ皆さん、私の気持ちをご理解ください。

以下に、私が「日の丸・君が代」の強制に反対し、職務命令に従えない理由をお伝えし、一緒に考えてくださるようお願いしております。

1. 都教委が進める「日の丸・君が代」教育は教育行為に反し、教育を破壊することだと思います。

「日の丸・君が代」について生徒が考え意見形成をするに必要な資料や機会を提供せずに、起立・斉唱を指示することは、教育の条理に反すること、調教に他なりません。時の政権担当者に不都合な事実や真実は隠し、「大本営発表」だけを垂れ流し、子どもたちを戦争に駆り立てた戦前の軍国主義教育と同じです。

また職務命令に従わない教員を処分することで徹底させるこの強制の仕方は、生徒たちに「命令には考えずに従え」「長いものには巻かれよ」と教えるようなものです。

私は生徒たちが自分の頭で考え判断できる人に、「真理と平和を希求する」(改定前の教育基本法)人になってほしいと願い、仕事に当たってきたつもりです。生徒たちにも、『みんながするから』ではなく、自分の頭で考え、判断し、行動しよう。おかしいことには、『おかしい』と勇気を持って言おう」と話してきました。ですから、私はこうした校長・都教委に加担できません。

この学校の生徒たちの多くには、理論的な理解は難しいことかもしれませんが、だからと言って、嘘をつくことはできません。国の命令に従い役立つことを強いられる社会では障がいを持った人は、過去の歴史が示すように差別排除の対象になりやすくもっとも被害を受けます。だから命令で支配するような流れに従うわけにはいきません。

2. もの言えぬ学校、社会にはいけない、と思います。

ほとんどの教職員が「日の丸・君が代」の強制はおかしい、と思っていても、もの言い行動すれば、異端視され、不利益を被ります。それらを覚悟しなければものを言えない組織や社会を、私は恐ろしいと思います。戦前・戦中の社会と同じだと思います。

戦前、弾圧を受け続ける人たちがいる一方で、多くの人はそんなことには無関心で生き、戦争開始。赤紙が来て、我が子が兵隊に取られる段になって声をあげたくとも、すでに時遅し。「お国のために」と我が子の命を差し出す親がどこにいますか？ 「私の子どもは戦場に送らない」と本心を言えなくなってしまい、「皇国の母」として勇ましい素振りをして我が子を戦場に送り出しました。そして、戦死の報。

これは昔のことで、今の時代にこんなことが起きるはずはない、とお思いでしょうか？
いいえ。いつの時代もどの国でも、どの組織・社会でも、煙のうちに声をあげることがしなければ、大火事になってから消す（声をあげる）ことはできなくなります。

戦前人々に、侵略を聖戦と思わせるのに大きな働きをしたのは、マスコミと学校教育でした。戦後、民主主義は学校から始まりましたが、同じように、戦争も学校から始まりました。今また、「戦争が学校から始まる」状態にあるといっても過言ではないと思います。人々が本当の気持ちを言えなくなり、行動を自粛するようになった時、権力を持った人たちは、暴力をむき出しにしています。戦争もそのようにして始まったのです。

なお、東京の学校現場では、「日の丸・君が代」だけでなく、足立区の学力テスト不正問題に見られるように、教育行政から下される理不尽なすべての指示に、NOの声をあげ、跳ね返すことがかなり難しくなっていました。私たちは日常的に奴隷状態に置かれていると感じます。何とかしなくては！と歯ぎしりする思いです。

ですから、教員の一人として声をあげ、行動でそれを示します。

3. 戦後世代の一人として、戦争責任・戦後責任も感じています。

私が「日の丸・君が代」の強制に反対するのは、1、2の理由で十分なのですが、私がそのように考える原点を少し述べます。

私が指示・命令に考えずに従うことの恐ろしさを実感したのは、父の時代に日本がした侵略戦争の実相を知った時です。日本軍に虐殺された人々に思いを馳せるといたたまれなくなり、父を問い詰めました。10代終わりの頃です。直接間接は別として侵略戦争に加担した父の子どもであることを自覚し、だから、戦争責任・戦後責任を私のこととして捉えていこうと思いました。私の思考の基本にあるものや、1、2で述べた私の考えは、このときに学んだものであり、私の戦争責任・戦後責任に基づくものでもあります。

「日の丸・君が代」の強制は、戦争責任・戦後責任を日本が放棄する証明であり、「他国の人と仲良く」の対極にあるやり方です。平和な社会は「おかしいと思ったことには従わない」自由を認め合うこと以外にはあり得ません。

皆さん、みんなの思いを具体的な形にし、外に向かって発信し、行動していきましょう。
理は私たちにあるのですから、きっと、子どもたちのための学校を取り戻せます。

2008年3月24日

根津 公子